



男がいらない？  
被災地ボランティア記⑨

仮設住宅を訪ねて「オヤツ？」と思つたことがある。集会所での集いに男性の参加者がほとんどいないことだ。

三カ所の仮設を訪ねたが、二カ所はゼロ。三カ所目で二人の男性が参加しただけである。

「なぜだろうか？ 帰宅して妻にこのことを話すと「男性の参加者が少ないのは被災地に限ったことではない。デイ・サービスなどの施設でも男性はポツンと一人で、みんなの輪に入らない傾向がある」という。

退職後の高齢男性が集まるところは囲碁・将棋、グラウンド・ゴルフなど個人的趣味がほとんどで、男性のボランティアグループは女性に比べ少ない。男に何か問題があるのだろうか。男性は組織・管理会社の中で長く働き、周囲の人は仲間というより競争相手。会社中心の生活で、上から下への指示で行動する。「本音が出るのは酒を飲んでい

る時」の傾向がある。また日本の長い男尊女卑の封建社会の中で、女性と一緒にボランティアや集いに参加するのはプライドが許さないという気持ちがあるのかもしれない。当初、男性の参加者が少ないことを被災地の問題と思っていた。確かに被害を受けた特別の地域である。しかし、そこでの人の営みは一般社会と同じで、むしろさまざまな社会の問題が凝縮され、問題が顕在化しているように思える。

つまり、被災地の集会所への男性の参加者が少ないのは被災地の特徴ではなく、日本の今日の社会の傾向なのである。

今回、若い女性や主婦が中心のボランティアチームの一員として被災地を訪れ、女性から多くのことを学んだ。

女性はおしゃべりによく言われるが、陰口や悪口は別として大変良いことだ。男は縦社会の中で隣人と対等に交わることは少ない。女性は横社会の中でおしゃべり上手。その中から隣人との絆(きずな)や共感する力を持つている。「相手と喜怒哀楽の



集会所に集う男性は少ない

感情を一緒に感じ、共感する」という共感能力。考えてみれば、これこそ動物と違う、人間らしさの原点ともいべきものだ。だから母なる女性は強く、男より平均寿命も長いのもかもしれない。

もう残り少なくなつた人生、肩書き社会に別れを告げ、今までの自分の殻を打ち破り、女性に負けないよう高齢化社会を輝いて生きる男性になりたい。考えてみれば今回の我々のボランティアも、神父を除けば大人の男は私一人だ。被災地に出かけるまでは、興味本位に「何かしてあげるボランティア」だった。それが現地のスタッフの皆さんと一緒にいった女性ボランティアから「ともに歩むボランティア」に視点が変化した。



女性ボランティアに教えられ自分の殻から出た気がする